

資本概念と労働の二重性

中 尾 訓 生

「商品を二重の形態の労働」に分析することは、マルクスにとって「古典派経済学の一世紀半以上にわたる諸研究の批判的成果」であった。そしてこれは『資本論』の「商品に表示された労働の二重性」に結実し、経済学を理解するための基軸であると表明された。

しかし『資本論』解釈者の多くはこの点の重要性を解釈のなかに生かしてはいない。彼らは「労働の二重性」について引用するところ大であるが、「商品に表示された」労働の二重性について語るどころ小である。「商品に表示された労働の二重性」が「労働過程と価値増殖過程」へと展開し、この展開が『資本論』の基礎であることは、マルクス自身がいつているところである。

「商品に表示された労働の二重性」から「労働過程と価値増殖過程」へと展開するマルクスの思考過程で注意すべきことは、前者に「商品の分析にかんする学説史」が、後者には「生産的及び非生産的労働」についての学説史の検討が照応していることである。

一般化するならば、資本主義社会の運動法則の解明を課題としている『資本論』の展開と彼の学説史研究の関連に注意しなければならないということ。これは『資本論』のなかに潜在して、その展開を支えているから解釈者の私達は注意を要する。

『資本論』のプラン草案(1863年)をみると、「資本の生産過程」という篇の末尾に「剰余価値に関する諸学説」「生産的及び非生産的労働に関する諸学

説」を予定していたことがしられる¹⁾。理論研究の深化につれてマルクスは、プランを変更していくのであるが、この学説史研究の過程で消化されたものは、マルクス自身の概念として『資本論』に血肉化されるのである。この経過については、『剰余価値学説史』に付されている序文が説明している。

この説明を参考にしながら、上述の関連を、すなわち学説史研究によって獲得されたものが、マルクスの核心となっている論理にどのように吸収されているのかを検討しなければならない。

マルクスが先行する膨大な諸理論を検討して獲得したものは、また多いであろうが、それらはマルクスの論理になっているもの、換言するとマルクス独自の概念に至るものと、この論理の傍証となるものとに分類できるであろう。いうまでもなく本稿があつかうのは、前者である。上述した照応関係はそのための視角である。エンゲルスへの手紙(1865年7月31日)のなかで「理論的な部分(はじめの三冊)を完成するためには、まだ三つの章を書かなければならない。それからさらに第四冊、歴史的・文献的な部分を書かなければならないが、これは僕にとっては相対的にもっとも容易な部分だ、というのは、問題はすべてははじめの三冊で解決されており、この最後の冊はむしろ歴史的形態でのくりかえしだからだ²⁾」と、マルクスは書いている。本稿は、はじめの三冊に吸収されたもの、しかも、その核心として結実していったものを摘出する。

序文が示している「学説史」研究のマルクス体系における位置づけの変遷については、参考になるが、マルクスの思考形成を読みとるためには、逆にその苦闘の跡を消し去りかねないものである。個々の諸論述を関係・接合するだけではマルクスのブルジョア経済学批判の論理を解釈することはできない。

「商品の分析に関する学説史」においてマルクスはジェイムズ・スチュアートを次のように評している。「彼にあつては、経済学の抽象的諸範疇が、まだ

1) 『剰余価値学説史』序文(マル・エン全集:26 I 大月書店)以下『学説史』

2) 『資本論にかする手紙』(上)137頁(岡崎・訳)

それらの素材的内容から分離する過程にあり、したがってこの両者が互に融けあって曖昧になっているのだが交換価値という範疇においてもまたそうであった³⁾」

マルクスは、ここで経済的諸範疇（言語）の発生とそれらが、整合性を得るためには、つまり抽象的、形式的体系となるためにはそれらの母胎である素材から分離しなければならないことを指摘する。もちろん根本的には諸範疇と素材との未分離は現実の商品経済の未成熟が対応している。

ステュアートに依ると、あるものの交換価値はそのものの内在的価値 (intrinsic worth) とその使用価値 (useful value) の合計である。内在的価値とはそのものの素材によって評価される。使用価値はそのものにつけ加えられた労働によって評価される⁴⁾

このステュアートの交換価値規定をマルクスは素材的内容との格闘を示していると解釈する⁵⁾ マルクスの解釈の背後には、この交換価値規定は、リカードの価値規定に収斂するという考えがある。

「リカードは苦心の末、商品の価値が労働時間によって規定されることを純粹に説明した。」リカードに至って諸範疇は素材から分離し、抽象的、形式的モデルが設定された。マルクスが先行する論争点は必然的に交換価値を純粹に定式化したリカードのうえに集中するとして四項目をあげているが、いずれも素材的内容とは切断されて論ぜられ得る⁶⁾ もちろん、この四項目はマルクスが解釈・整理したものであって別様の整理の仕方が存在するであろうことを否定しないが、リカードに至って論争点は形式的操作が可能になったということが要点である。ステュアートとリカードのあいだにマルクスはA・スミスをとりあげ解釈を与えている。スミスの価値規定もまたリカードの価値定式化に向かうと考えている。

3) 『『経済学批判』71頁 (宮川・訳 青木文庫) 以下『批判』

4) J・ステュアート『経済学原理』(三)40頁 (中野・訳)

5) 『批判』71頁

6) 『批判』77頁

マルクスは素材的内容との格斗ということを具体的労働（現実的労働）と抽象的労働（平等な社会的労働）との格斗，相克としてとらえる。したがって，リカードの世界は質的区別のない，ただ量的区別だけが存在する抽象的労働の世界である。

「商品の分析に関する学説史」の意義は，古典派経済学の一世紀半以上にわたるこの格斗を読みとったこと，彼らが無意識的に使用する諸範疇（言語）の根源を把握したことにある。

このことが，「商品に表示された労働の二重性」として結実していく。この段階では，マルクスはリカードへの評価が示しているように抽象的労働が勝利して具体的労働が退却したと解釈していたようにおもえるが，『資本論』では，彼らは具体的労働と抽象的労働を反映している言語を使用しているということとその通りに認める。つまり一方が正しく，他方は誤りであるとするのではなく，その事実を容認する。それが「商品に表示された労働の二重性」の要点である。

だから，「商品に表示された労働の二重性」を次のように理解するだけで事足りるとするわけにはいかない。

「すべての労働は，一面では生理学的意味での人間的労働力の支出であって，この同等な人間的労働または抽象的人間労働という属性において，それは商品価値を形成する。すべての労働は他面では，特殊な，目的を規定された形態での人間労働力の支出であって，この具体的有用労働という属性において，それは使用価値を形成する⁷⁾」この引用文の内容からだけでは，学説史の検討を通して消化，血肉化したものを読みとることは困難であろう。なぜ一つの労働が抽象的労働であり，具体的労働なのか？ あちらで抽象的労働をし，こちらで具体的労働をするというのであるか？ あるいは，彼らが具体的労働をし，私達が抽象的労働をしているというのであろうか。

もし，このとうりであるならば「商品の分析に関する学説史」の整理・分類には困難はなかったであろう。そうではなくて，抽象的労働が具体的労働

7) K・マルクス『資本論』I. 61頁。(向坂・訳 岩波)

であり、具体的労働が抽象的労働なのである。労働主体の二重性が、商品に顕現しているということを彼らが、商品について語っているところからマルクスは認識したのである。⁸⁾

二

「現実的な有用的労働と、交換価値を措定する労働とのあいだの対立は、十八世紀中、どの特殊種類の労働がブルジョア的富の源泉であるか？ という問題の形式でヨーロッパを騒がした⁹⁾」

生産的及び非生産的労働の規定をめぐるの当時の大論争は、その終局においてはその論争の残骸だけをあれこれ論じる筆達者なディレクタントや教師ふうの概説書執筆者たちの得意とするところとなったとマルクスは述べている。

この論争が内包していた核心はそれぞれ理論として結実するのであるが、その主要なものは蓄積論と、そしてブルジョア社会を歴史的に特徴づける関

8) 拙稿「商品に表わされた労働の二重性」(山口経済学雑誌・27の1・2号)

副田光輝氏の、——「商品で表示される労働の二重性格」の疎外的意味。(『マルクス疎外論研究』所収)——をみておく。——「商品で表示される労働の二重性格」という『資本論』の章節は、商品进行分析して使用価値および価値というその二要因を析出し、それぞれの実体をさぐっただけのものであって、その実体、たとえば価値の実体としての抽象的人間労働が、どうして価値になり、価値として現象するに至るかは、まだそこでは問題になっていない。」——たしかに氏の指摘されているとうりである。しかし、次のようにいふべきである。この節では、労働の二重性格については述べられているけれども、それが「商品に表示された (dargestellten)」ということの意味が説明されていないと。

氏は続けて「これが問題になるのは、商品がその本性に即して交換関係において考察されるとき、すなわち交換価値論、商品物神性論および交換過程論においてである。そしてこれらの諸節において、それまで保留されていたところの、商品を生産する労働の社会的性格が具体的に問題になるのであり、これをまって初めて、労働の二重性格の疎外的意味が判明する」(58頁)と述べる。価値形態論を承けた物神性論でマルクスは、私有財産に基づく分業システムのもとで総労働の関連を「私的労働」「社会的労働」の用語で説明しているのであるが、氏が重視するのはこの「私的労働」「社会的労働」の関連である。マルクスは、具体的労働と抽象的労働の拮抗関係から価値形態論を展開し、氏が述べているように等価形態の特色の一つとして、「私的労働がその反対物である直接に社会的な形態にある労働になること」をあげている。「私的労働」と「社会的労働」は「具

係概念としての「資本」の形成へと向かう。ここで問題とするのは、後者である。蓄積論はかかる関係性を示す「資本」を所与として展開される。蓄積過程の各要素は関係性によって位置づけられる。

彼らには生産的労働、非生産的労働をいかに規定するかが、第一の課題であったが、マルクスにはその規定そのものは重要ではなかった。

「生産的労働であるということは、それ自身労働の特定の内容、その特別な有用性¹⁰⁾又はそれが表わされる独特の使用価値とは全然関係をもっていないところの規定である。」「生産的労働と非生産的労働との相異は、単に労働が貨幣としての貨幣と交換されるか、資本としての貨幣と交換されるかということにある¹⁰⁾」

マルクスの上の説明では「貨幣」「資本」概念が与えられると生産的、非生産的労働の規定は与えられるのである。『資本論』の準備ノートには「生産的労働」について多くのことが論じられているのに『資本論』の展開には「生産的労働」の概念はその位置を与えられていないことが直接的にそのことを語っている。

体的労働」と「抽象的労働」の拮抗関係が展開されてからその理論的内容を与えられている。氏はこの点を見ていない。だから氏は価値形態論が「貨幣」概念を獲得する思考・認識構造の解明であることをみない。だから次のように説明しても重大な点を見のがしてしまう。「私的労働の生産物は交換において、その使用対象性から分離された価値対象性をうけとる。すなわち、商品を生産する私的諸労働は、交換において「現実の不等性を捨象」され、「人間労働力の支出、抽象的人間労働としてもっている共通の性格へ還元」されてしまう。そしてこの「異種の諸労働の同等性という社会的性格」は物質的に異なったこれら諸物の、諸労働生産物の共通な価値性格という形態で生産者たちの、並びに一般の意識にのぼるのである。」(60頁)

交換によって生産物の質的差異が捨象され、共通なもの、抽象的人間労働に還元される。生産者、交換者はこのことを意識していると氏は述べているのであるが、これでは、マルクス理論のエッセンスは無に帰してしまうであろう。生産者、交換者は「価格」のなんたるかを知る必要はないし、彼らにとって「価格」という言語は所与なのである。私達は言語のなんたるかを知らなくても、言語の使用に困難はないのと同じである。氏の上の説明は理論上の困難を見落している。

マルクスはまた人々が価値に還元しているのは抽象的労働だけでなく、具体的労働へも還元していることを学説史研究によって明らかにしている。氏の解釈の誤りは、私有財産に基づく分業システムを自明のこととして設定していることから生じている。交換によって差異が捨象され、共通なものへの還元されている。「そしてそれが価値として現

彼はこの論争を通して「資本」概念の核心を獲得した。論争の本来的問題点を次のようにいう。

「生産的労働とは、労働能力が資本主義的生産過程において登場するところの全関係および仕方様式の簡略な表現であるにすぎない!」¹¹⁾

問題の焦点を絞っていくために、A・スミスの規定への言及からみていくことにしよう。

マルクスはいう!¹²⁾

A・スミスには、「生産的労働」について正しい見解と、誤った見解とが絡み合っている。

正しい見解と誤った見解とが「同一文章のなかにつぎつぎに続いて出てきている。」正しい見解(a)「生産的労働は資本と交換される労働である。」であり、誤った見解(b)「生産的労働は商品に実現される労働」である。(a), (b)は、A・スミスの以下で引用する文中の(A), (B)に相応する。

「労働には、それが加えられる対象の価値を増加させる部類のものと、このような結果を全然生まない別の部類のものがある。前者は、価値を生産

われること、これが疎外である」(61頁)そこでこの交換を私的労働の社会的労働への転換として表現して、「形態」の説明にかえている。氏の解釈では「抽象的労働」と「具体的労働」は重きをなしていない。重要な用語は「私的労働」と「社会的労働」である。

「私有財産に基づく分業システム」は、氏の場合説明がないのでわからないが、おそらく歴史的な具体的事実として確認されているのであろう。したがって「私有財産」とは何か? という問いが回避されている。「経済的諸範疇の素材からの未分離」とか「分離」ということでマルクスが主張したことは、「意味担体」と「意味内容」の関係、つまり、「形態」と「実態」の関係であるが、氏の場合「形態」は「私有財産に基づく分業システム」とおさえられているが、これが歴史的具体的事実として(おそらく)確認されているため、氏は疎外論、物神性論にとっての重要性を強調されてはいるが「形態」の解釈に失敗している。当然「物神性」も二様の表現をとることに気がついていない。(つまりリカードの陥った物神性とブルードンの陥ったそれとの差異)「私的労働」と「社会的労働」を氏は重要視しているから、当然『経済学批判』でのマルクスの展開を主に解釈しているが、「商品の分析に関する学説史」から、私が解釈しているように、後の『資本論』へと転回する論理はみることをしない。

9) 『批判』 70頁

10) 「直接的生産過程の結果」(『資本論綱要』所収・215頁・向坂訳)

11) 『学説史』 26 I 503頁

12) 『学説史』 26 I 165頁・171頁

するのであるから、これを生産的労働と呼ぶ。……(A) 製造工の労働は、一般に自分が加工する材料の価値に、自分自身の生活維持費の価値と自分の親方の利潤の価値とを付加する。

これに反して召使の労働はどのような価値も付加しない。……(B) 製造工の労働は、ある特定の対象または売りさばきうる商品にそれ自体を固定したり実現したりするのであって、こういう商品はこの労働がすんでしまったあとでも、すくなくともしばらくのあいだは存続するものなのである。それは、いわば、ある他のばあい必要に応じて使用されるために、貯蔵され、貯えられる一定量の労働である。……これに反して召使の労働は、ある特定の対象または売りさばきうる商品にそれ自体を固定したり実現したりはしない。かれの労働は、一般的にはそれがおこなわれるまさにその瞬間に消滅してしまう……¹³⁾」

マルクスはA・スミスが(a)とともに(b)の見解を並存させている理由を「四篇九章」(『諸国民の富』)での重農学派への対立と依存から説明している。

A・スミスは重農学派によって不生産的、あるいは不妊的階級とされている製造業は、召使と異なり「この階級はそれ自身の年々の消費の価値を年々に再生産し、この階級を扶養し雇用する資財または資本の存在をすくなくとも継続させるのである¹⁴⁾」から不妊的とするのは不当であるという。

召使の労働は、それをおこなう瞬間に消滅してしまうから、かれらを扶養し、雇用する元資の存在を継続させない。他方製造工が資財または資本を継続させているのは、彼らの労働が売りさばきうる商品に固定することによってである。

(b)の見解が生じているのは以上の経過によってであるとマルクスは解釈する。

(b)の見解によってマルクスは「スミスは形態規定から、すなわち資本主義的生産の立場からすれば「生産的労働者」とはなにであるかということの規

13) A・スミス『諸国民の富』I 522頁(大内・訳 岩波)

14) 『諸国民の富』II 992頁

定から逸脱する¹⁵⁾」として(a)と(b)の見解を対立させるのであるが、A・スミスの思考においては、(A)と(B)は内的に関連している。

労働が商品に固定しているか、否かという視角からのアプローチは、(A)が示している価値論展開の不十分さを補っているのである。

(a)が正しく、(b)が誤りというマルクスの説明を鵜呑みにするとかえって、この論争からマルクスが獲得したものを、つまり問題の本質を見失うことになるだろう。

A・スミスにあっては「賃金や生活維持資料の価値を回収」しうるのは、資財や資本が変態しながら存続しているという日常の経験に固着して確認されている。利潤や地代の源泉が不明確であるから、つまり賃金や利潤、地代の決定メカニズムとそれが明確に区分されていないから、(A)と(B)が並存するということになっている。(A)と(B)はA・スミスの思考にあっては関連している。

「二篇五章」(『諸国民の富』)では農業部門が、利潤に加えて地代をも生みだすがゆえに最も生産的であると説明しているが、その理由として、役蓄も生産的労働者であり、自然もまた人間とならんで労働するからであるとしている。利潤の源泉を問うことをしない、リカードにとっては、これは全く余計な説明であろうが、しかし価値概念を純粹に定式化したとされているリカード価値論の母胎は、このような素材的内容との格闘を示している思考から生じていることを確認することは、マルクスを解釈する場合にはもちろんのことであるが、一般的にも理論の性格を検討するときには重要なことである。

(A)は、利潤の源泉は労働にあるとしているように解されるが、それは変態によって実現される、つまり資本家の手に入るということと未分離なままに把握されているから、マルクスのように(a)と(b)を対立させるのは強引である。(a)での資本をA・スミスの規定した資本の意味に解釈しないから、マルクスは、(a)と(b)を対立させることになる。ただし、マルクスは、(A)と(B)の思考に

15) 『学説史』26 I 175頁

おける関係は、別のところでは認識しているのである。

リカードを終点とする価値論は諸範疇の素材的内容との格闘の過程として学説史の分析をしているということから、それは判断できる。

ここでA・スミスの資本概念を想起してみよう。「資本はつねにある一つの形態で、かれの手をはなれ、もう一つ別の形態でその手に帰って来るのであって、それがかれに、ある利潤をもたらすことができるのは、このような流動、つまり継続的交換のおかげによってだけなのである!¹⁶⁾」この資本規定の特徴は、利潤は変態を経過することによって得られるということ、そして変態が「かれの手をはなれ、もう一つ別の形態でその手に帰って来る」というように視覚的に把握されているという点である。同様の把握の仕方では、固定資本は「主人を変えることなしに、つまりもうそれ以上流通することなしに収入または利潤をもたらすような諸物」と規定されている。この資本規定は、(B)と照応している。マルクスの資本規定と対照させてスミスの規定の不十分性を確認しておくことにしよう。資本とは価値の増殖体であり、運動体であるというとき、マルクスはスミスと同様に価値の増殖(=循環)を素材の変態によって確認するのであるが、しかし、マルクスは資本規定においてスミスとは異なり素材の変態の出発点、したがって終点にも制約されてはいない。だから三循環の統一、として把握することができた。つまり「資本の一部分、といっても絶えず入れ替わる一部分は、絶えず再生産されて、貨幣に転化される商品資本として存在する。他の一部分は、生産資本に転化される貨幣資本として存在する。第三の一部分は商品資本に転化される生産資本として存在する。三つの形態全部の不断の存在は、まさにこの三つの段階を通じての総資本の循環に、媒介されているのである!¹⁷⁾」

スミスにあっては素材の変態に注意が集中し、価値の循環を一般化することができなかつた。換言すると生産資本の循環だけに視角が限定されているということである。この視角の限定は循環の表現においても欠陥を露呈させ

16) 『諸国民の富』I 449頁

17) K・マルクス『資本論』II 120頁以下『資』(向坂・訳 岩波)

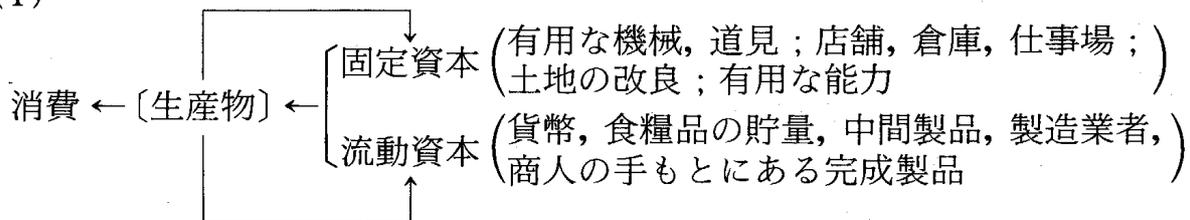
る。ここでいわれている素材の変態とは、財貨を調達し、製造し、そして販売する。

この繰返しの過程のことである。もちろん、この過程には例えば綿花、綿糸、綿布のようなかたちでの変態もイメージされている。これが社会全体における物の流れに翻訳されて社会の物的代謝ともイメージされる。

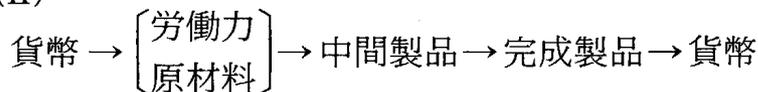
さて、素材の変態に生活維持費や原料費が利潤をともなって回収されることが、スミスの場合、重ね合わされている。

この重ね合わせは、以下の図（I・II）のようになっている。例えば、IIの場合、貨幣で労働力と原料を購入するのであるが、この貨幣が次にどのような変態をするか、同じことであるが、完成製品を売って貨幣を得るのであるが、この完成製品が、その後どのように変態するかということはスミスの資本規定では把握できない。したがって全体的な変態図であるIが全体を把握することはできないのは当然である。素材と価値の混在・未分離を示している。それがまた、流通資本と生産資本内部での流動資本との同一視をもたらしている。

(I)



(II)



矢印は財の流れ(変態)を示している。

リカードには素材の変態への注意の集中は存在しないで素材は量に還元されており、したがってマルクスに取り上げられたスミスのあの(A)と(B)にみられるような思考における関係は存在しない。固定資本と流動資本の区別は正しく価値移転(価値回収)の仕方からなされている。

資本は価値の増殖体であり、それは変態として遂行されているのであるが、

変態は個別的経験において把握されるのであり、それを社会全体に考察を進めようとするスミスの遭遇した困難に陥る。「社会的全体性」をいかに設定するかという問題である。

マルクスの資本の変態・循環図式はこの困難を巧みに解決している。¹⁸⁾

私達は後にこの困難が具体的労働と抽象的労働の関係から解決されていることをみるであろう。

(A)、(B)で規定されている生産的労働によってスミスが問題としていることが、蓄積であることは、その章の表題「資本の蓄積について、すなわち、生産的労働と不生産的労働について」が示すとうりである。

ただ(A)と(B)で規定された生産的労働は、前述したように資本規定が、あいまいであるから対立しないで並存しているだけであって、資本蓄積の展開においてどちらかに重点的に立脚するなら、その展開は異ったものになるだろう。(A)は価値の視角であり、対象を量に還元して認識するのであるが、(B)は素材の視角であるから、対象はその属性においてまず把握されることになる。

18) 『要綱』において、この問題と格闘しているマルクスを読むことができる。

「資本流通にあっては形態転換と素材転換(物質代謝)とが同時におこなわれる。……素材的側面からみれば、生産では用具が消耗され、また原材料が加工される。結果は生産物——その要素的諸前提とは異なった、新たに創造された使用価値——である。素材的側面からみれば、生産過程ではじめて生産物が創造される。これが第一の、そして本質的な素材的变化である。市場では、貨幣との交換では、生産物は資本循環からつきだされて消費に帰属し、消費の対象——個人的欲望を最終的に充足するためであれ、他の資本の原材料としてであれ——になる。商品と貨幣との交換では素材的变化と形態変化とが合致する、というのは貨幣においてはまさに内容それ自体が経済的形態規定に属するからである。」(『経済学批判要綱』Ⅲ 617頁。高木・訳)

『資本論』での「資本の諸変態とその循環」上述の説明方法と比較すると、『要綱』では「形態」規定と「素材」との関係の把握が不十分で消化されていないことに気がつく。マルクスは「商品と貨幣との交換では素材的变化と形態変化とが合致する」というのであるが、ここでの商品は商品資本のことであり、貨幣は「貨幣資本」のことであるから、したがって資本が形態変化をしていると解釈すべきであり、さらにそのためにはこの形態変化を貫通(循環)している資本を規定する必要がある。また仮に、(理論上の想定として)単純な商品流通 $W-G-W$ の場合において、素材的变化と形態変化とが合致しているといい得るとしても注意すべきは、これら素材を商品、あるいは貨幣と規定せしめる「あるもの」の存在の認識である。換言すると「形態」と「素材」を「結びつけるもの」の把握である。

(A)を深化させると抽象的、形式的なモデルに至るであろう。(B)の場合は具体的で歴史記述に至るであろうが、労働の素材的内容に入り、悪くするとマルクスの指摘したような俗学者や筆達者なディレクタントの好むところとなる。

(A)が形式性を追求する傾向が強くなるのにたいして、(B)は常に現実と遊離することはない。経済学は数学ではないから厳密さを求めての形式性の追求もその対象と遊離するならば無意味となろう。

したがって、(A)と(B)がスミスの思考において並存していたことは、かかる意味において健全であったのである。

生産的労働論争におけるように、(A)と(B)の規定、どちらが正しいかというかたちでの論争は問題があるといえよう。

また、マルクスの生産的労働に関する個々の叙述部分を取り上げて、国民所得論へ接木をするのは、「生産的労働の規定におけるマルクス経済学の俗流化」の道であろう¹⁹⁾

(拙稿「マルクスの貨幣論の成立に関する一考察」『経済論究』1971年26号所収)

「あるもの」「結びつけるもの」とは社会的全体性のことである。したがって問題は次のようにもいえる。社会的全体性はいかにして認識できるのか、と。(拙稿「資本の諸変態とその循環」『山口経済学雑誌』31巻1・2号)

- 19) P・バランはこの論争が内包している問題点を認識している。彼は潜在的な経済余剰を規定して次のように述べる。「潜在的な経済余剰のこれらの四つの形態を見分けたり、測定したりする際に、われわれは若干の障害にぶつかる。これらの障害は、結局のところ本質的には、潜在的な経済余剰というカテゴリー自体が現存の社会制度の範囲をこえるものであり、ただに所与の社会経済組織の、容易に観測可能な行為に関連をもっているだけではなくて、いっそう合理的に組織された社会の、容易に見透しできない映像にも関連をもっている、という事実に着目せしめうる。」(『成長の経済学』30頁 浅野・高須賀・訳) この障害を認識しないところから「生産的労働の規定」の俗流化が生じる。バランは「潜在的な経済余剰」を規定せしめるものとして「客観理性」の存在をあげる。「客観理性の内容は、決して、時間的、場所的に、不変にきめられるわけではない。むしろ逆に、客観理性自身は決して止まることない歴史の流れの中に埋もれ、その外形と内容は自然および社会一般と同程度に、歴史過程の動態に左右されている。」「客観理性は自然および社会の両者に関する人間の、拡大し、深化しつつある科学的理解に進歩の自然のおよび社会的条件の具体的な探究と実践的な利用とに、しっかり根ざしているものなのである。」(同上、37頁)

マルクスはここでの客観理性を労働主体のなかにみてとったのである。

三

「労働過程一般の単純な見地からすれば、私達には、生産物に、否むしろ商品に実現される労働が生産的であるように見える。資本主義的生産過程の見地からすれば、ヨリこまかい規定が加わる。すなわち直接に資本を増殖せしめ、或いは剰余価値を生産し……資本家のため商品の剰余的加量の中に表現される労働のみが生産的である²⁰⁾」

マルクスはスミスへの評注において上記の引用にみられる前者の視角からの見解を、誤った見解とし、後者からのそれを、正しい見解であると説明していたが、この説明は、スミスの資本規定をマルクス自身の資本規定で代置したことから生じており、スミスの展開にそって解釈するならば、(A)と(B)はつまり両視角は相補う関係にあることを指摘しておいた。

実際、マルクスも『資本論』の「労働過程と価値増殖過程」の章では、両視角を統一させている。

しかし、「労働過程と価値増殖過程」へと結実した両視角の統一の仕方を、この章から読み取ることは、困難である。

それは、「商品の分析に関する学説史」と「商品に表わされた労働の二重性」への思考の発展を後者からだけ読み取ることの困難と同じものである。この困難は、次のことに思い至れば乗り越えることができる。

具体的労働は抽象的労働であり、抽象的労働は具体的労働であるということ、したがって労働過程は価値増殖過程であり、価値増殖過程は労働過程であるということである。

つまり、商品経済社会における労働（＝実践）から両視角は生じているのである。

労働過程一般の視角とは労働の素材的内容、具体的労働の視角であり、資本主義的生産過程のそれは、抽象的労働の視角である。

だから彼らの諸論述が具体的労働、抽象的労働の視角から整理できるので

20) K・マルクス「直接的生産過程の結果」(『資本論綱要』所収、208頁 向坂・訳)

ある。両視角の差異をまずはっきりさせておこう。そしてそれが上述の如く労働の二重性論へ転回しているのは対象を認識する主体がまた対象に関与しているという社会科学の困難の解決である。

それは必然的に労働主体の実践様式を考察することになるであろう。

経済的諸範疇は具体的労働と抽象的労働を根源としていることは「物神性論」でマルクスが強調していることであるが、彼らにはこの点についての認識は存在しない。諸範疇が、その社会の構造によって秩序だてられているとは考えない²¹⁾。彼らは所与とされている諸範疇を使用して、個々の課題に応じて論理の構築に努めるのである。したがって諸範疇は、その課題に応じた対象によって選択、規定されるから、それらの根源とは乖離する。つまり彼らの諸論述は大体において具体的労働か抽象的労働かのどちらかで整理されるということなのである。彼らは労働主体を一面的に規定しているから、主体に立脚して規定される資本主義社会の関係性を特徴づける場合に混乱に直面する。彼らが依拠している社会解釈の一面性が暴露される。「貨幣」、「資本」についての彼らの規定がそれを示している。例えば「貨幣」について、彼らはそれを機能の面からのみ把握する。

21) 商品経済の拡大、深化とともに社会の物的代謝は抽象的労働を根源とする範疇によって表現されるようになるのであるが、これら諸範疇は抽象的、形式的操作を可能とするから、そのモデルは厳密化とともに、あたかも数学のように独立の展開をし、対象からの遊離をひきおこす。

ポランニーが注意を喚起したのは、実際の「経済」がこのモデルによって時間と空間を超えて解釈されることの誤りである。

彼はホモ・エコノミクスを本来の人間であるとし、市場システムに包摂された社会を本来的社会であるとする考えの誤りを指摘する。ポランニーは「経済的」という言葉のふたつの意味について述べる。「第一の意味は形式的であり、経済化あるいは経済性というように目的—手段関係の論理的性質から生じるものである。この意味から「経済的」ということについての稀少性の定義が生まれる。第二は、実体=実在の意味であって人間は他のあらゆる生き物と同様、自分を維持する自然環境なしには瞬時たりとも存続できないという基本的事実をさし示すものである。……このふたつの意味、つまり形式的なものと同様の実体=実在のものとあいだに共通する部分はまったく存在しない。」

共通する部分はまったく存在しないという点についての検討に焦点を絞るのがよいであろう。第一の意味が成立するためには、質的に素材的に多様な財が、そして土地や労働さえもが、量に還元されることが必要である。この場合にのみ、目的—手段の経済化

価値尺度、流通手段、購買手段、支払手段、蓄蔵等々と。しかし、これら諸機能が一般的等価物（＝金）によって統括されていることには理解が及ばない²²⁾ 一般的等価物としての貨幣は、生産を規定する目的および推進する動機を、つまり経済主体の行動を体現している。

またスミスの「資本」規定にみられる素材と価値との混在が、スミスの眼をP……(P')循環に固定させ、勤勉、節約の人間をつくりあげている。

使用価値を形成する具体的労働は「人間と自然とのあいだの物質代謝の一般的条件であり、人間生活の永久の自然条件であって、したがって、この生活のいかなる形態からも独立したものであり、むしろ人間の一切の社会形態に等しく共通である²³⁾」外的対象物に働きかけ、それを自己の精神に取り込み、同化する労働は具体的であり、質的である。

人間と蜜蜂の相違をマルクスは次のようにいっている。「労働過程の終りには、その初めにすでに労働者（人間）の表象としてあり、したがって、すでに観念的には存在していた結果が出てくるのである。彼は自然的なものの形態変化のみを惹起するのではない。

彼は自然的なもののうちに、同時に彼の目的を実現するのである²⁴⁾」この

(economizing) が表現可能となる。

ポランニーは第一の意味と第二の意味は全く無関係で、その関係が存在するとしても、たまたまの偶然にすぎないという。

彼は第二の意味の「経済」が通常の経済学では把握し得ないことを強調する。

私達はマルクスの解釈から第一の意味が存在し得るのは抽象的労働による量化が実際に進行しているからであると理解している。

だから、ポランニーのように第一の意味と第二の意味を全く無関係であるとするわけにはいかない。ただし、ポランニーが通常の「経済学」を批判するために「経済的」という言葉のふたつの意味を分類することには賛成である。目的—手段関係からの形式的操作はその対象から遊離すること大であるから。(K・ポランニー『人間の経済』I 70～71頁。玉野井・栗本・訳)

市場システムのもとでの社会の物的代謝（ポランニーがいうところの第二の意味の経済）を把握するためには「価値」概念は欠かせぬものである。それがリカードの「価値」概念であるか、新古典派の「価値」概念であるかはいまは、問う必要はない。

22) 拙稿「マルクスの価値尺度論」山口経済学雑誌23巻3・4号

23) 『資』I 239頁

24) 『資』I 232頁

ように規定された具体的労働を反映している諸範疇をマルクスは学説史研究において摘出するのである。他方では、抽象的労働を反映しているそれを摘出する。商品経済が発展し、労働力が商品化されると労働と労働の対象的諸条件は量に還元され、労働の合目的性格は潜在化する。そうなると労働者が生産手段を使うのではなく生産手段が労働者を使うようになり労働者は生産手段に従属する。

社会的に素材の変換（＝物的代謝）は次のように表現される。

$$W' \begin{array}{l} \swarrow W-G-W \\ \searrow w-g-w \end{array} \begin{array}{l} \swarrow P_m \dots P \dots W' \\ \searrow A \end{array} \begin{array}{l} \swarrow W-G-W \\ \searrow w-g-w \end{array} \begin{array}{l} \swarrow P_m \dots \\ \searrow A \end{array}$$

素材は量に還元され、関心は使用価値ではなく量の差異のみとなる。物的代謝は価値（＝量）範疇で表現される。使用価値は価値の担い手としてのみ意味を有することになる。労働主体は具体的労働と抽象的労働との拮抗関係において把握されることになる。『資本論』以前では、マルクスはどちらかといえば、具体的労働を反映する範疇は抽象的労働を反映するそれによって敗退するものとして、換言すると、リガードを最終のゴールとする過程は、価値論の純化過程と分析していた。『資本論』で、労働が二重の内容をもっていること、つまり拮抗関係を理解することが「経済学を理解にとって決定的な跳躍点である。」と表明する。

『資本論』は具体労働と抽象的労働との拮抗関係を軸に構築されている。抽象的、形式的論理は必ず現実と交渉する具体的操作を基礎にしている。マルクスの価値論（リカードの価値論ではなく、）は搾取関係を基礎としている。利潤率は剰余価値率が転化したものであることを強調する。この搾取関係の認識は拮抗関係によってのみ可能なのである。

資本家とは、マルクスに依ると、 $G-W-G'$ の人格的表現である。労働者（階級）だけが具体的労働と抽象的労働との拮抗関係を体現しているのである。

私達は、いま二つの問題に直面していることに注意すべきである。

一つは、これまで論じてきた彼らの諸論述批判における拮抗関係であり、

もう一つは、経済システム（社会の物的代謝）における拮抗関係である。前者について、もう少し論じることにする。

「生産的労働と非生産的労働をその素材的内容によって規定しようとする試みは、次の三つの源泉に由来する。

一 商品とは如何なるものか、生産的労働とは如何なるものか等々という経済的形態規定を、この形態規定または範疇の素材的担い手それ自身のもつ属性と見なす、資本主義的生産様式に特有な、その本質から生ずる物神崇拜的見解。

二 労働過程そのものをみれば、ある生産物（ここでは物質的富のみが問題であるから、物質的生産物）に結実する労働のみが生産的であるという見解。

三 現実的再生過程においては——その実質的要素を考察すれば、再生産的物財に表現される労働と単なる奢侈品に表現される労働との間には、富の形成等に関して大きな差異があるという見解²⁵⁾」

ここで私達が問題にするのは、(一)、である。対象が具体的に素材の関連において把握することが可能であれば、はじめから生産的労働に関する論争も生じてこないであろう。

例えば、農業労働だけが富を産出するということを認めるならば、農業労働を生産的労働とすることには異論は生じないであろう。また(三)のように再生産の過程が素材的に表現できるならば、当然再生産に参画している労働を生産的労働として抽出できるであろう。労働過程や再生産過程が複雑になるとそして特に労働を維持するための素材の中味が多様になると素材タームだけでは表現することがむずかしくなり、労働過程、現実の再生産過程を構成している各要素の関連を明確にするため価値範疇が必要となってくる。

したがって、(一)が本来、解明されなければならない内容である。

さて、物神崇拜的見解は、労働主体の一面化から生ずるのであるから(一)で

25) 同上「直接的生産過程の結果」218頁

述べられている他に、もう一つの内容があることが察せられるだろう。(一)で述べられていることは、拮抗関係ではなく具体的労働のみを反映している対象認識であり、それは、例えば生産手段を資本であると認識することである。資本という範疇に含まれている資本主義社会の関係性を、生産手段の素材的属性とみなしてしまう。したがって、資本主義社会が生み出す色々な問題、例えば失業、貧困、富の分配の不平等、は素材の改良によって解決できると考える。プルードンは、金貨幣が恐慌、不況を生み出すと考えて金を時間紙券で代置することを提案した。このように、素材を関係性とみなすところの物神崇拜が(一)である。

これにたいして、関係性の表現そのものを素材的内容とする見解が存する。これは、抽象的労働のみを反映した対象認識である。

資本主義社会の関係性をすべての歴史に共通していると解釈する。したがってこの見解は資本主義社会の固有の問題を把握することはできないで、(一)とは対照的な物神崇拜的見解である。(一)を斥け、後者の見解をも斥けるのが、拮抗関係による対象認識である。

主体は人間本来の欲求に基づいて対象に働きかけるが、他方では、その社会によって規制された欲求によって主体は制約を受けていると考える。マルクスはベンサムを批判する。「ベンサムは素朴きわまる無味乾燥さをもって、近代的俗物、殊にイギリス的俗物を標準的人間として想定する。この変てこな標準的人間とその世界とにとって有用なものは、絶対に有用なものなのである。ついで、かれは、この基準によって、過去、現在および将来を価値判断する²⁶⁾」

この批判は、いうまでもなく主体の欲求が社会によって制約されていることをベンサムが無視していることからのものである。

欲求および労働の二重性 (= 拮抗関係) は、認識論的には、客体的に社会を構成している要素とその社会に参加し、活動 (labour ではなく work) する次元にかかわっている。

26) 『資』I 766頁

欲求も労働も資本主義社会の構成要素としては量に還元され、質的差異は存在しない。この場合の主体は物的代謝の、つまり生産、消費領域を相互に関連づける主要素である。

現実には、主体の（経済）行為は自由なものであると意識されており、その行為が全体的関連によって規制されているとは思われないし、その行為が繰返されることも自由意志であると考えられている。だから、このように考えられている主体が、過去、現在、将来を判断することに異論がなくなる。

既に述べたようにマルクスは、このような主体を抽象的労働に翻訳し、本来的に自由な主体を具体的労働で表現する。具体的労働（work）が抽象的労働（labour）の歴史性を確認する。

資本主義社会における「搾取」を、そしてまたこの社会の「危機（Krise）」を感じとるのは、具体的労働に基づく主体である。

「搾取」にしても、「危機」にしても、その社会の内部にあっては、それらが量的に表現できるものではないから感得することはできない。

したがって経済システム（物的代謝）を考察するとき、マルクスの場合、問題となるのは、拮抗関係で表現される主体のあつかいである。経済学者に周知のロビンソン・クルソーが好まれるのは、ロビンソンは彼らが、設定した経済モデルが所与としている原理、〔最小の苦痛で最大の効用を得る〕を体現しているからである。ロビンソンがこの原理に商品交換が基礎としている「自由・平等」とともに実在性、客観性を付与するのである。

しかし、商品交換、 $W-G-W$ は全体的には資本の循環範式、 $W'-G' \cdot G$
 $-W \left\langle \begin{matrix} P_m \\ A \end{matrix} \right\rangle \dots P \dots W'-G' \cdot G - W \left\langle \begin{matrix} P_m \\ A \end{matrix} \right\rangle \dots P \dots$ で表示されるように、労働

者にとってのそれは、労働力(A)——賃銀(G)——生活手段(W)である。彼らは生きるために労働力を繰返えし、販売しなければならない。それ以外の選択は彼らには存在しない、したがって最小の苦痛とは餓死に比してのことである。労働者にとっての最大効用の獲得は、Gの用途を決定することにすぎない。

この原理は次のようにも説明される。——「代替的用途をもつ希少な諸手

段」から最大の効用を得る。——A—G—Wの内容が、このように一般化されて合理的人間行動の結果であると拡大されると、もはや資本主義社会の特徴づけはあらゆる時代に共通するものと解釈される。しかも、最大の効用の中味は一切問うことをしない。換言すると、それは個々人の主観に属することとして分析する必要がないとされている。しかし、財の使用価値から得られる効用とその財に価格が付されたとき、その財から得られる効用は一致しているということとはできない。前者から得られる効用は、その財の増加とともに一般的に低減するが、後者の場合、低減するというよりも上昇する場合がまず基本である。より多くの貨幣（価値）をとという要求、G—W—G'でそれは表現されている。前述の原理は、個々人と諸財との関連からのものであるが、資本主義社会の人間行動の諸方式²⁷⁾を問題とするならば、まずA—G—Wと $G—W \left\langle \begin{matrix} P_m \\ A \end{matrix} \right\rangle \dots P \dots W'—G'$ を取りあげるべきである。そうすると、社会から孤立したロビンソンではなく、労働者と資本家の行動が考察の対象となるであろう。

マルクスが関心をもったのは労働者が賃銀の用途によって最大の効用を得るということのみならず、労働者がこのようなモデルを打破する性向を有しているということであった。マルクスの設定したモデルは、物的代謝（素材転換）のみではなく物的代謝が所与としている関係をも含んでいる。「諸商品の交換は、社会的な素材転換、つまり私的個人の特定の生産物の交換が、同時に個々人がこの素材変換のなかでとりむすぶ一定の社会的生産諸関係の創造でもあるような過程である²⁸⁾」と述べる。これはハバーマスを借用すると次のようにいえる。「システム統合力のある経済システムが社会統合の課題をも引受けている。」

従来、「マルクス経済学」の恐慌論は、素材変換 ($W'—G \cdot G—W \left\langle \begin{matrix} P_m \\ A \end{matrix} \right\rangle \dots P—W'—G' \cdot G \dots$) が周期的に「切断」されながら自己完結的に継続することを明確にしたが、ローザ・ルクセンブルグのような分析事例を別にすると、

27) L・ロビンズ『経済学の本質と意義』25頁（中山・辻・訳）

28) 『批判』63頁

「切断」が恐慌(Krise)に転化するか、どうかは労働者の対応にかかっているものであって、この面からの考察は欠かせぬものとおもわれるが、ほとんど無視されている。

「切断」の「恐慌」への転化は労働主体が包み込まれている解釈体系の幻想が「切断」によって、その根拠を失うことから始まる。

ここで幻想というのはその解釈体系が素材変換の一側面のみを照射するものでありながら労働主体のありようをも、その解釈に照応したものに固定化してしまうからである。つまり素材変換が継続、維持されているかぎり、それから生じている重商主義的解釈も、P—P循環に立脚しているスミスの解釈も一面的に労働主体を規定する。

このことは労働主体の側からいうならば、その社会への帰属感を強めるということである。「資本(=価値の増殖体、運動体)」にたいする労働主体の協調と反発は資本が生ぜしめる社会解釈——資本の諸変態と循環に根拠を有している。——の受容と拒否を通してあらわれる。「切断」によって、つまり失業によって労働主体は自由・平等の契約関係の正当でないことを感得する。

資本の諸変態と循環は素材変換と労働主体のそれへの順化・帰属という、次元のそれぞれ異にしているものを、(ハバーマスを借用するとシステム制御の問題と社会統合の問題²⁹⁾ 抽象的労働と具体的労働の拮抗関係(労働の二重性)で結合し、構成したのである。

資本の変態・循環過程の拡大、深化は資本の有機的構成の高度化を必然的に生ぜしめるとマルクスは分析し、有機的構成の高度化は一方では素材変換の内的制限をもたらし、他方では、その過程において、労働主体の果す役割の重要性が増大すると述べる。

それは生産の一要素としての抽象的労働としての重要性ではなく、具体的労働の役割である。ただ『資本論』には素材変換のメカニズムの解明には多くの章節が与えられているが(後継者が恐慌論として発展させる部分。)後者

29) J・ハバーマス『晩期資本主義における正統化の問題』(細谷・訳)

については章節としての形も与えられないまま、全く不十分なままに残された。しかし、マルクスは有機的構成の高度化によって表現される物質的諸条件を背景にした資本主義社会の出口に関して「労働日の短縮が根本条件³⁰⁾」であると述べる。

これは資本が強要する欲望に対抗する労働者自身の欲望を創出するための根本条件であると考えられる。労働者が資本の循環過程から生じる欲望を無視することによって、資本主義社会の出口に到達することが、そして豊富な物質的諸条件を背景にするならばそれが可能であることを示唆している。資本の増殖に貢献する抽象的労働と資本に対抗する具体的労働による展開、つまり具体的労働と抽象的労働の拮抗関係（労働の二重性）の論理は堅持されている³¹⁾。

30) 「未開人が彼の欲望を充たすために、彼の生活を維持し、また生産するために、自然と闘わねばならないように文明人もそうせねばならず、しかも、いかなる社会形態においても、可能ないかなる生産様式のもとにおいても、そうせねばならない。文明人が発展するほど、この自然必然性の国は拡大される。

諸欲望が拡大されるからである。しかし同時に、諸欲望を充たす生産能力も拡大される。この領域における自由は、ただ次のことにのみ存しうる。すなわち、社会化された人間、結合された生産者が、この自然との彼らの物質代謝によって盲目的な力になるように支配されることをやめて、これを合理的に規制し、彼らの共同の統制のもとに置くこと、これを、最小の力支出をもってまた彼らの人間性にもっともふさわしく、もっとも適当な諸条件のもとに、行なうこと、これである。しかし、これは依然としてなお必然性の国である。この国の彼方に、自己目的として行為しうる人間の力の発展が、真の自由の国が、といってもかの必然性の国をその基礎として、そのうえにのみ開花しうる自由の国が、始まる。労働日の短縮は根本条件である。」（『資』Ⅲの2、1025頁）

31) 実際は(I)と(II)は一体となっており区分することは困難であろうが、労働力を再生産するに必要なその生活手段は生活手段に体化されている労働時間が〔I〕肉体の維持にとって必要不可欠な部分、すなわち自然的欲望によって規定される部分と、〔II〕文化、

教育的状況によって規定される部分、に区別されるであろうから両者に分割できる。資本主義経済の発展は〔I〕に比して〔II〕の部分を上昇させるであろう。そして〔II〕のうちには資本が生みだすムダ（浪費）の部分、つまり生活手段は本来的にその使用価値によって規定されるはずなのに資本はそれを価値によって規定し、労働者（消費者）に提供する。F・ハーシュのいうところの「局地財」もこの部分〔II〕に含めることができるであろう。（『成長の社会的限界』都留重人・訳）〔I〕に比しての〔II〕の上昇は、資本にとって〔II〕の部分の販売が重要となってくるが、資本は労働者を導いて〔II〕への欲望を創出せしめる。かくて、資本はローマの奴隷のように鎖でもって労働者をつながなくてもよいのである。労働者に〔II〕を求めさせることによってそれをおこなっている。しかしながら、物質的生産条件の高度化は労働者に〔II〕の部分の労働者自身の時間とし得るという選択も可能としている。他方、生産の場におけるマルクスの主張は、次のようである。高度な機械体系は社会化された、結合された労働者に依存しているのであるが、機械体系が高度化されるに従い、労働者は細分化され、機械の付属物となる、という。しかしながら労働過程に合目的的、意識的に参画し、その法則性を認識する労働主体、つまり社会化された労働者を機械体系の発展が必要としてくる。論理展開とはいいがたいが、このようにマルクスは具体的労働と抽象的労働の拮抗関係を緊持していたと解釈される。（拙稿「不変資本と可変資本」山口経済学雑誌24の1・2・3合併号）